國にては小柴といふよし、大倭本草十二の巻にいへり、その灰汁を取て布を染るに黄色なり、また一種比左々木とて叢生小樹あり、葉比左加木よりも薄く、嫩葉の葉鮮紅にて火のごとし、三種共に形狀相似たれど、香氣なければ、眞の賢木に別て、比賢木とはいへるなるべし、比は疎劣の心にて、曾祖父を比々知々、曾孫を比々古、孫枝孫生を比古枝、比古波江、稂を比豆知などいふも此よしなるべし、上野に刀禰川、比刀禰川、信濃に田井、比田井あり、これも眞の刀禰川、田井より劣れる方に比の字をかうぶらせいへる也、比奈津女、比奈乃國も、都人、都所にむかへて劣の鄙女鄙土をいへり、かゝれば比左加木は眞榊に似たれど、香氣なき劣の木なれば、その名おへりとみゆ、

〔倭名類聚抄十四染色具〕柃灰　蘇敬曰、又有柃灰、柃音靈燒柃木葉作之、並入染用、今按俗所謂椿灰等是也、

烏草樹

〔新撰字鏡木〕惱左世夫　烏草樹左之夫

〔倭名類聚抄二十木〕烏草樹　楊氏漢語抄云、烏草樹、佐之夫乃紀、辨色立成説同、

〔古事記下仁德〕太后○仁德后之媛、中略、即不入坐宮而引避其御船、泝於堀江、隨河而上幸山代、此時歌曰、都藝泥布夜、夜麻志呂賀波袁、迦波能煩理、和賀能煩禮婆、迦波能倍邇、淤斐陀氐流、佐斯夫袁、佐斯夫能紀、斯賀斯多邇、淤斐陀氐流、波比呂、由都麻都婆岐、斯賀波那能、氐理伊麻斯、芝賀波能、比呂理伊麻須波、淤富岐美呂迦母、

〔古事記傳三十六〕佐斯夫袁は夫字延佳本に天と作るは、次句なる夫を舊印本などに天に誤れるを宜しと心得て、此をもさかしらに改めたるなり、わろし、烏草樹をなり、袁は余と云むが如し、○中略此樹契冲云、今山里人はさせぼの木と云、柃に似て小き實あり、熟すれば紫の黑みたるやうにて、童などは取て食ふとぞ承る、柃は和名抄に見えて、今俗に毘左々紀と云木なり、出雲風土記に、佐世乃木葉とあるは、此烏草樹にやと云り、或人烏草樹は、今俗にさゝぶの木とも、玄やくぶの木とも云と云り、出雲風土記大原郡佐世郷處に、須佐能袁命佐世乃木葉頭刺而踊躍云云、